

第5学年 社会科 学習指導案

1. 小単元名『水産業のさかんな地域』

(教科書：『小学社会 5 上』 p. 74～89／学習指導要領：内容（2）ア、イ、ウ）

2. 小単元の目標

日本の水産業の現状を理解するとともに、これからの水産業について考えることができる。

3. 小単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
水産業に携わる人々の仕事の工夫や努力を意欲的に調べ、我が国の水産業の発展に関心をもつ。	水産業を取り巻く様々な問題点に気づき、これからの水産業の発展について考え、わかりやすくまとめる。	写真や資料から日本の水産業の実情を読み取り、それを根拠として活用することができる。	日本の水産業の特色や現状、水産業に従事している人々の工夫や努力を理解できる。

4. 指導にあたって

(1) 児童の実態

普段の生活でいろいろな水産物を食べているが、それがどのような努力のもとで食卓まで届いているか知らない児童が大半である。基本的に、社会的なことに興味・関心が高い児童が多いが、様々なことを知っている児童とそうでない児童との差が大きい。

また、新聞やニュースの報道等で水産資源の減少が伝えられているが、それらの事実を知らないか、または知っていても自分の生活と関連づけて考えている児童は少ない。

こういった実態の児童に対し、日本の水産資源に関しての事実や問題点について資料等を通して示し、現在の水産業の実態を理解させ、今後の日本の水産業のあり方を考えさせる。

(2) 教材について

水産業に関する指導内容は、主に二つに分けられる。

一つは水産業の現状である。自分たちの生活と関連をもたせるため、今までに食べたことのある水産物から導入する。そこからわかることとして、いろいろな種類の水産物を食べていること、海のものだけでなく、川のものも食べていること、外国産のものも食べていることなどに気づかせる。次に「なぜ、日本ではいろいろな水産物がとれるのか？」という問いを投げかけ、教科書や資料集を使って調べさせる。その結果、暖流と寒流が流れていること、大陸棚があることなどに気づかせる。また、東北地方から関東地方にかけて大きな漁港があったが、東日本大震災の影響でこれらの漁業基地が大きな被害を受けたことも理解させたい。(教育出版『小学社会 5 上 (平成 27 年度版)』 p. 89 に関連の記述がある。また、同 p. 83 の漁業生産量の変化のグラフでも、2011 年の養殖業で明らかな落ち込みが見られる。)

もう一つは、水産業の問題点と今後のあり方についてである。外国産の水産物を示し、「こんなに良い場所にある日本がどうして外国から魚を輸入しているのだろうか？」という問いを投げかける。児童に予想を立てさせたあと、調べ学習を行う。この調べ学習を通して漁業の問題点が浮き彫りになる。最後に、これから水産業はどうしたらよいかを考えさせる。主に2点の問題がある。1点めは水産資源の問題。2点めは食生活の変化である。（食生活の変化については、次單元「これからの食料生産」でも学習する。そのための布石となる。）水産資源の問題については最終的に「養殖をすればいい」「自然環境を良くすればいい」というところに落ち着くと予想される。そういった児童に対し、サケの回遊についてのアニメーションを見せ、魚に200海里（人間が作った境界線）は関係ないことや、他国の乱獲問題から自国だけで水産資源を守ることは難しいことに気づかせる。これによって、日本だけでなく世界と協力しないと解決しない問題であることを理解させる。

これらの指導を行うことによって、児童に日本の水産業の現状を多面的に理解させ、これからの水産業について考えさせることができると考えている。

（3）指導上の工夫・留意点

児童に問題意識をもたせ、学習に取り組ませるために、ズレを生む教材を用意した。スーパーマーケットで国産のサケと輸入のサーモン（チリ産）が一緒に売られていることを提示し、「こんなに良い場所にある日本がどうして外国から魚を輸入しているのだろうか。」という問題意識をもたせる。このサーモンはチリで養殖されているものである。それにもかかわらず、国産の天然のサケより値段が高い。実はこのサーモンは刺身用のサーモンで、寄生虫や病気に気をつけて養殖されたものであり、日本の漁業の様々な問題点に関連していると考ええる。そこで、このサーモンを教材に使う。

本小単元の学習では、グループでの話し合い、追究活動を取り入れた。個人だけで調べることが難しい児童がいるため、小グループでの調べ学習、話し合いを取り入れた。話し合い活動では、様々な考えに触れさせることによって、一面的な考えにならないようにすることができると考えた。基本的には、個人での思考→グループでの話し合い→全体での発表、の段階を踏んで授業を展開する。個人での思考と、全体での発表との間に、グループでの話し合いを入れるのは、児童一人一人の発表の時間、児童間での質疑応答の時間や機会を確保するためである。また、話し合い活動を行う際はその目的をはっきりさせてから行う。基本的に話し合い活動は、他の人の意見を聞いて自分の意見の参考にすることを目的としている。そして、話し合いを行う際はホワイトボードを用いて意見を可視化させる。音声による言葉のやり取りだけではついていけない児童がいるからである。さらに、出された意見を残しておくことにより、考えを深めることができると考えたからである。

今までの指導で、発言を行う際は必ず理由を問うてきた。今回、5年生の児童ということもあり、根拠とその解釈（理由）、自分の意見（主張）を述べるように指導する。今までは「理由」としていたところを、根拠と解釈に分けて発言できるようにする。これによって、根拠が正しいかどうかと、その根拠から導き出された解釈が妥当かどうかについて、児童が考えることができるようになると考えたからである。

5. 小単元の指導計画（総時数 12 時間）

時	ねらい	○学習活動 ・ 内容	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
① （つかむ）	食べたことのある水産物を通してこれからの学習に興味をもつとともに、日本には多くの水産物があることに気づく。	○食べたことのある水産物を挙げることを通して、水産業への興味を高める。 黒板に書かれた水産物を見て、何か気づくことはありますか。 ・水産物の種類が豊富であること、海だけでなく川のものも食べていること、外国産のものも食べていることに気づく。	◎水産物の写真（サケ、ブリ、マグロ、サンマ、アジ、サバ、イワシ、カニ、エビ、タコ、イカ）、刺身の盛り合わせの写真 ◇食べたことのある水産物を、整理しながら黒板に板書する。 ◆水産物に興味をもち、すすんで発表しようとしている。 （関・意・態／発言）
② （つかむ・調べる）	なぜ、日本ではたくさんの水産物が食べられているのか考え、日本の周りにはよい漁場があることを理解することができる。	○日本の周りの様子について教科書の資料などを使って調べる。 なぜ、日本ではいろいろな水産物がとれるのか？ ・海流や大陸棚などの自然条件によって、日本の周りには豊かな漁場が広がっていることを理解する。	◎日本の主な漁港と、水あげされる主な水産物の量（教科書） ◇個人での調べ活動→グループでの話し合い→全体での発表 ◆資料から日本の漁場の様子を読み取ることができる。 （技／ノート）
③④ （調べる・まとめる）	魚に含まれる費用を考えることから、水あげされた魚がどのような過程を経て自分たちのところまでたどり着くかを理解することができる。	魚の値段にはどのようなものが含まれるのだろうか？ ○魚の値段にどのようなものが含まれるかを予想し、調べる。 ・魚の値段に含まれる輸送費等から魚をとる仕事だけではないことに気づく。 ・水あげされた魚が、せりや加工場など様々な過程を経て自分たちのところまでたどり着いていることを理解する。	◎1尾の魚に含まれる費用（資料集） ◇予想を立てさせてから調べさせる。 ◆水あげされた魚がどのような過程を経て自分たちのところまでたどり着くかを理解している。 （知・理／ノート）

⑤ （つかむ）	なぜ日本が魚を輸入しているか、予想を立てることができる。	○なぜ日本が魚を輸入しているか、予想を立てる。 ・2枚の写真を提示する。 こんなに良い場所にある日本がどうして外国から魚を輸入しているの？ ・個人で予想を立て、グループで予想を検証。全体に発表する。 ・自分たちが考えた予想が正しいかを確かめるためにはどんな資料や情報があつたらいいか、また、どうやったら手に入るかを考える。	◎国産のサケの切り身の写真 ◎チリ産のサーモンの写真 ◇写真はチリ産から提示し、児童の反応や予想を見て国産のサケの写真を提示する。 ◇値段の部分にマスキングを貼っておき、どちらの値段が高いか予想させてから、はがす。 ◆生活経験や既有知識から予想を立てたり、検証したりすることができる。 （思・判・表／発言・ノート）
⑥ ⑦ ⑧ （調べる）	前時に立てた予想が正しいか、情報を集めて調べ、判断することができる。	○実際に調べ学習を行う。 ・グループ内で分担を行い、自分たちで考えた方法で調べる。 ・調べた結果を持ち寄り、グループ内で検討を行う。必要があれば再度調べる。	◎漁業別の生産量の変化（教科書） ◎漁業生産量と消費量・輸入量の変化（資料集） ◎200 海里水域と日本の漁業の生産量（教科書） ◎漁業で働く人の数の変化（教科書） ◎チリ産サーモンに関する資料 ◎チリとの輸出入の金額、品目 ◎『総合百科事典ポプラディア』（ポプラ社） ◇前時に児童が見たいと言った資料・情報がどうやったら手に入るか、事前に調べておく。また、児童だけでは入手が困難な場合は、教師から提示する。 ◆教科書や資料集などの資料を読み取り、それを根拠として活用することができる。 （技／見取り・ノート）

⑨ ⑩ (まとめ)	グループごとに結論を発表し、外国から魚を輸入している一番の原因は何かを考えることができる。	一番の原因は何ですか？ ○グループごとに根拠となる資料を示しながら、どのような解釈を行い、どのような結論に達したかを発表する。 ○各グループの発表を踏まえて一番の原因だと自分が考えるものをノートに記述する。 ○ホワイトボードを使って、発表された理由どうしの相関関係を図で表す。 ○相関図をもとに、一番の原因だと自分が思うものを一つ決め、ノートに書く。	◇発表時に必要な資料を印刷し、配付する。 ◆友達の発表や根拠となる資料を総合して、日本の水産業の現状について考えることができる。 (思・判・表／発言・ノート) ◇各グループの発表(理由)の間の相関関係を図示させ、矢印が最も集まっている場所を探させる。 ◆グループで相関図を作成し、それをもとに一番の原因だと思うことを再度、考えることができる。 (思・判・表／発言・ノート)
⑪ (調べる・まとめる)	これからの日本の水産業の問題として、水産資源の保護について考えることができる。	○これからの日本の水産業の問題として、水産資源の保護について考える。 これからの日本の水産業はどうしたらいいのだろうか？ ・養殖業や栽培漁業、漁法の工夫など、水産資源の減少を解決するための方法を資料から考える。	◎育てる漁業、水産資源の保護に関する資料(教科書、資料集) ◎「森は海の恋人」の事例(教科書) ◇個人での思考→グループでの話し合い→全体での発表、といった流れで学習を進める。 ◆教科書や資料集などの資料をもとに、日本の水産業のこれからについて考えることができる。 (思・判・表／発言・ノート)
⑫ (深める)【本時】	自国の水産資源を守るためにどのようなことが必要なのか、考えることができる。	○新たな資料を参考に、どうやら魚を増やすことができるか再考する。 魚(水産資源)を増やすには、(今までの学習から考えたこと)それだけで大丈夫でしょうか？ ・水産資源の減少について解決するために、前時までの方法の他にどのようなことが必要かを考える。	◎「サケ・アニメーション」 ◎中国の乱獲を伝える新聞記事 ◇個人での思考→グループでの話し合い→全体での発表、の流れで学習を行う。 ◆新たな資料をもとに、水産資源の保護について再度考え直すことができる。 (思・判・表／発言・ノート)

6. 本時の指導（第12時）

（1）本時のねらい

自国の水産資源を守るためにどのようなことが必要なのか、考えることができる。

（2）本時の展開

時配	○学習活動 T：発問 C：児童の反応	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
7	○前時までの確認をする。 魚（水産資源）を増やすにはどうしたらいいのだろうか？ C：養殖業を増やせばいい。 C：栽培漁業を行えばいい。 C：魚にとって、よりよい自然環境にすればいい。 C：しばらくは魚をとる量を控えればいい。 T：なるほど、そういったことを行えば魚は増えるんだね。 これらを行えば、日本の漁業は安心だね。 C：はい。	◇前時までに出示された意見の確認を行う。
15	○新たな資料を読み取り、水産資源の減少について解決するために、前時までの方法の他にどのようなことが必要か、個人で考える。 T：では、この映像を見てみましょう。 C：サケはアラスカの近くで過ごす期間のほうが長い。 C：魚に国境はないんだ。 T：この資料も読んでみましょう。 C：日本が水産資源を保護しても、他の国がとってしまったら意味がないかも。 C：これでは魚が増えないかも。 魚（水産資源）を増やすには、それだけで大丈夫でしょうか？ T：ノートに自分の考えを書きましょう。 C：ルールを守らない国に罰を与えるべきだ。 C：せっかく育てても他の国にとられちゃう。 C：日本だけ魚を育てても意味がないかも。 C：他の国にも呼びかけなければいけない。	◎「サケ・アニメーション」 ◎中国の乱獲を伝える新聞記事 ◇机間巡視を行い、児童の意見を拾っていく。 ◇自分の意見が書けない児童には声をかけ、資料を見た感想を引き出す。
10	○グループで話し合う。 T：では、今の意見をグループで話し合います。無理に一つの意見にまとめる必要はありません。よいと思った意	◇意見が出ないグループに対し、声をかけ、意見を引き出す。

	見は自分の意見に取り入れましょう。 C：日本だけ魚を育てても、魚は増えないので、他の国にも呼びかけなければならないと思います。 C：魚を増やすためには、ルールを作り、守らない国には罰を与えるべきだと思います。	◇話し合いで考えが変わった児童には、青色で新しい考えを書かせる。
10	○グループごとに発表をする。 T：では、グループで出された意見を発表してください。 よいと思った意見は自分の意見に取り入れましょう。 C：1班では、このままでは魚が増えないので、他の国にも呼びかけなければならないという意見と、ルールを作って守らない国には罰を与えるべきだという意見が出されました。 C：2班では、他の国にとられるぐらいなら、先に魚をとってしまえばいいという意見が出されました。また、他の国と話し合う必要があるという意見も出しました。 C：3班では…（以下続く） T：発表された意見に、質問や意見はありませんか？ C：私は「他の国にとられるぐらいなら先に魚をとってしまえばいい」という意見に反対です。なぜなら、それでは結局、魚が増えないので、問題は解決しません。 C：僕は、他の国が魚をたくさんとっても、魚が増えるような取り組みをし続ける必要があると思います。そうでなければ、結局は魚がいなくなってしまうからです。 C：私は、魚を増やすためには、近くの国と話し合う必要があると思いました。罰を与えるという意見もありましたが、その前に話し合う必要があると思います。	◇発表を聞いて考えが変わった児童には、赤色で新しい考えを書かせる。 ◇全体の発表のあと、質問や意見が出されない場合、他の人の意見を聞いて考えが変わったという児童を指名し、誰のどんな意見を聞いて考えを変えたのか発表させる。
3	T：最後に、魚（水産資源）を増やすためにどんなことが必要か、あなたが一番良いと思う方法を書きましょう。 C：私は最初、日本だけ魚を増やせば大丈夫だと思っていましたが、それだけではうまくいかないことがわかりました。他の国と話し合うという意見に賛成です。 C：日本だけ努力をしても他の国が守らなければ意味がないので、他の国ともルールを作る必要があると思いました。	◇自分の意見が書けない児童に対しては、誰の意見が一番納得したかを聞き、その意見を書くように支援する。 ◆新たな資料をもとに、水産資源の保護について再度考え直すことができる。 （思・判・表／発言・ノート）

7. 備考

「サケ・アニメーション」は新潟大学教授・宮菌衛先生が作成した教材用のアニメーション。サケの回遊期間と回遊範囲、日本近隣諸国の 200 海里水域が示され、日本に戻るサケが外国の海で育って

いる様子がわかる教材である。

【参考資料：教材構造図】

